札幌市中島児童会館・人形劇場こぐま座　資料室「MA・SO・BO」情報誌

MA・SO・BO通信

TAKE FREE 2024 11>12

寄稿

こぐま座・やまびこ座の紙芝居コレクション

児童文化研究者　谷 暎子

紙芝居は日本独自の文化財

紙芝居は日本独自の文化財である。1930年ころ子どもたちは街頭紙芝居に夢中だったという。紙芝居に見入る子どもたちを目の当たりにして基督教伝道師の今井よね（1897-1968）は、1933年に紙芝居刊行会を設立。『少年ダビデ』などの福音紙芝居を制作・刊行した。1934年には東大セツルメントの松永健哉（1907-1996）らが、紙芝居『人生案内』を制作し「児童問題研究」の附録にする。小学校教員になった松永は、紙芝居が教材として適していること思い謄写印刷紙芝居を制作・頒布した。1935年には高橋五山（1888-1965）が、幼稚園紙芝居シリーズ『赤ズキンチャン』などを全甲社から刊行。保育紙芝居の先駆けとなった。

札幌市こども人形劇場「こぐま座」と紙芝居

「札幌市こども劇場条例」には、こぐま座の事業として「人形劇、マリオネット、紙芝居、腹話術等の制作及び発表の場に供すること」とある。1976年7月に開館したこぐま座、1988年に設立のやまびこ座の館長は人形劇人の故・加藤博である。加藤は著書『人形劇と私』（1991年）に、「紙芝居は人形劇からの逃避ではなく、本当に自分の創りたい人形劇への一里塚とも言えるものなのだ」と述べている。彼が制作した紙芝居は『ごんぎつね』『ふなひき太良』『フレデリック』など7点で、児童館や劇場で演じることを考え大型紙芝居として制作。絵本を参考に台本と絵をつくり、「語り」は「街頭紙芝居を見たこともないし、成人するまで田舎で親しんだ浪曲や講談を思い出しながらの独学だった」と記している。

札幌市こどもの劇場やまびこ座と紙芝居

やまびこ座に寄贈された紙芝居を紹介しておきたい。

☆北星学園幼稚園教諭・保母養成所の寄贈紙芝居：1989年に紙芝居93点がやまびこ座に寄贈された。児童文化の教材であり、学生が保育実習などで活用していた紙芝居である。養成所は夜間で、働きながら学ぶ学生たちは授業、クラブ活動にも熱心で活気に溢れていた。卒業生は保育界で活躍していたが、養成所は1988年3月に閉校。やまびこ座を訪れる子どもたち、おとなたちに活用してほしいと願い寄贈された紙芝居である。

☆吉村一信紙芝居コレクション：館長の加藤博、岩崎義純と人形劇で交流のあった大阪の小田又治郎を介して、1989年に吉村環夫人が108点の紙芝居をやまびこ座に寄贈された。吉村一信（1924-1987）は大阪師範卒業後、1944～85年まで大阪、奈良の小・中学校で教育に携わる。とくに国語教育に力を注ぎ国語教育研究会、学校劇研究会などで活躍。同時に児童文化活動に情熱を注いだ人として知られる。一信（かずのぶ）はいっしんさんと慕われ、口演童話、紙芝居、人形劇、腹話術の脚本、絵、人形を制作し、仲間たちと上演して子どもたちに楽しみを届けた。寄贈紙芝居で最も多いのは大阪の教画出版の紙芝居54点で、吉村一信の『小鳥の家』『もみじ』などの3点を含む。ほかに手書き紙芝居、戦時紙芝居、札幌の新日本文化協会制作の紙芝居などがある。なおコレクションは、1989年と1998年の8月にやまびこ座で展示・公開された。2001年には、やまびこ座から幕別町図書館に14点が貸し出され「懐かしの紙芝居展」で展示された。

☆新日本文化協会制作・刊行の紙芝居：吉村コレクションには新日本文化協会が刊行した『ウイリアム・テル』『フランダースの犬』が含まれている。この2作は「世界名作紙芝居全集」として1948年に刊行された。ほかに『巌窟王』『寶島』『ベニスの商人』など8点である。絵は札幌に疎開していた梁川剛一が描いた。梁川は函館出身の彫刻家・挿絵画家で「少年倶楽部」の挿絵などで知られ、著書に『梁川剛一挿画大集』（1975年 講談社）がある。札幌では紙芝居のほか、エルム社の絵本『コーカサスの捕虜』など17点、北海道出版社の絵本『鉄仮面』など2点と、児童雑誌「北の子供」38冊の表紙絵も描き活躍した。なお梁川剛一が描いた紙芝居のレプリカが、2024年9月現在（10月31日まで）、資料室MA・SO・BO 657美術館で展示されている。

＊文中は敬称を略。

谷 暎子（たに えいこ）

札幌生れ。児童文化研究者。日本児童文学学会会員。ライフワークは北海道の児童文化史研究。北海道の児童出版物、北海道の紙芝居研究に携わる。著書に単著『占領下の児童書検閲』（新読書社 2004）、『占領下の児童出版物とGHQの検閲』（共同文化社 2016）、共著『ゴードンW・プランゲ文庫児童書目録』（ProQuest 2003）、単著『「北の子ども」―占領期の地域児童文化雑誌（1946～50）監修・解題』『金沢文圃閣』（2023～24）などがある。

連載 [第1回]

「障害」を感じさせない場所 ～パペットアートヴィレッジの取り組み

今年もみんなでごちゃまぜを楽しむイベントが始まりました。中島児童会館とこぐま座主催の『パペットアートビレッジ』です。

本事業は「共にあそぶ、共につくる」をテーマに、「障がいのあるなしに関わらず、それぞれの感性や特性を遠慮せずに出せること」「さまざまな人たちが参加して、共に創りあげること」を目的として、令和５年度に初開催されました。表現活動を通して、子どもたちから湧き出る「やりたい！　やってみたい！」という意欲や想像力を引き出す全11回の体験プログラムの最終回には、発表会が待っています。集まった子どもたちが自由にのびのびと過ごす時間や空間から生まれてくるものを、そのまま皆さんに観ていただく発表会は、どんなものになるのか全くの未知。スタッフである私たちもドキドキワクワクしながら本事業に参加し、子どもたちひとりひとりが自分らしさを発揮できるよう寄り添います。

さて、「障がいのあるなしに」…と掲げてはいますが、「障がい」のとらえ方は実は非常に曖昧なものです。先天的な病気や肢体不自由、医療的なケアがなければ生活できない「障がい」もあれば、ここ数年、よく見聞きするようになったADHD・ASD・LDなどの「発達障がい」も「障がい」として知られるようになりました。

昔なら、ちょっと落ち着かない子、こだわりが強くて頑固な子、音読するのが苦手だったり、発表ができなかったりする子として教室で受け入れられていた、あの子やその子が、目に見えない「普通」のフィルターによって、周囲に壁を感じるようになっているのかな、そんな「普通」フィルターは、子どもはもちろん大人でも息苦しいだろうなと感じています。

本事業の素晴らしいところは、その「普通」がないところかもしれません。初日の自己紹介では、大きな声が出せなければスタッフが耳を寄せて聞き取り、立てなければ、みんながその子の方を向き、オーバーリアクションで自己アピールする子は大いに注目し、それぞれの方法が自然と受け入れられる場なのです。

２回目は「へんてこパレードで着る、段ボールロボットを作ろう！」と、いかにもロボットな見本を示して創作が開始されました。…が、できあがった作品は、恐竜・ネコ・ウサギといった動物？から、宇宙服や洋服といったコスチューム、飛行機や車のような乗り物もあれば、人形劇のミニシアターまで飛び出すといった自由なもの。もし、これが学校なら「ロボットを作る」というテーマなのですから、「それはどんなロボットなの？」と説明を求めたり、「頭にかぶるものがあると、ロボットになるね。」とテーマに沿った創作を促したりするところです。それをせず、子どもたちから生まれたものを、そのまま受け入れ、形にしていくのがパペットアートビレッジなのです。（今回は、保護者の方の創作熱もかなり高まっていました（笑））

「障がいのあるなしに」…と掲げてはいますが、「普通」がないので「障がい」のあるなしを感じることはほとんどありません。参加したこども達も、引率する保護者の方も、我々スタッフも「さまざまな」人たちがごちゃまぜになって創作活動を行う姿に、ソーシャルインクルージョンという言葉がぴったりはまります。

田中 摩弓（たなか まゆみ）

遠軽町生まれ紋別育ち。北海道教育大学釧路分校卒業。国語科教員として、登別、苫小牧、札幌での中学校勤務を経て、現在は医療的ケアが必要な児童生徒が多く通う市立札幌北翔支援学校に勤務。

MA・SO・BO 本シェルジュ HON-CIERGE

本の案内人「本シェルジュ」厳選本の紹介
岸さん編 ④

岸 春江（きし はるえ）

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士
自宅に約3000冊の絵本を所有
主宰の絵本部「ファンタジア」は2019年　北海道読書推進運動協議会　「優良読書グループ　奨励賞」受賞

「二平方メートルの世界で」

前田海音・文　はたこうしろう・絵／小学館

札幌市の小学校へ通う3年生の前田海音ちゃんが北九州市主催の「子どもノンフィクション文学賞」小学生の部で大賞を受賞したことがきっかけで製作された絵本です。海音ちゃんは、脳神経の病気で３歳のころから入退院を繰り返していました。手術の辛さや学校へ行けない悲しみを感じながらも自分の病気や治療方法を理解し、家族に負担をかけているのではないかと心配します。率直な気持ちを綴る海音ちゃんのことばと、札幌の街並みを忠実に描きながら、ページごとに海音ちゃんの心情に寄り添う絵本作家はたこうしろうさんの絵が重なり合い、その健気な姿に涙が溢れます。入院生活の中で、自分らしく生きていくきっかけを見つけていく彼女から私がエールを送ってもらった気持ちになりました。

「セイロウさん」

かとうまふみ／ WAVE出版

頭の上にせいろを乗せたユニークな姿のセイロウさんは、合言葉の「むします。むします。むしますよ。」を唱えながら冷めたい食べ物をなんでも温めてくれます。そこに、ひとつだけたまごがかえらないと困っているアヒルがやってきて、慌てるセイロウさん。おはなしは終始シュールな世界でありながら、次々といろんなものを蒸していく湯気がリアルでとてもおいしそうです。みんなにほめられて、くねくねと照れる姿は愛嬌満点。読み終わったあとは、どうしても蒸し物が食べたくなり、我が家は本物のせいろを購入してしまいました。心もふんわりと温めてくれますので、寒くなるこれらかの季節におすすめです。札幌在住の絵本作家さんの作品です。

編集後記

北海道の児童文化を研究されている谷先生のお話はとても興味深く、埋もれている児童文化活動を掘り起こす作業は時間も労力も大変なものです。先人たちの努力や工夫が今を生きる私たちに、未来を願う気持ちやは同じだと勇気づけてくれます。（柳本）

お問い合わせ・お申し込み
札幌市中島児童会館　tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座　tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号（地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分）

MA・SO・BOに関する最新情報、MA・SO・BO通信のバックナンバーはホームページからもご覧いただけます。
https://koguyama.jp/masobo/index.html

MA・SO・BO通信　11・12月号　2024年10月15日発行　第26号
[発行]札幌市中島児童会館・札幌市こども人形劇場こぐま座指定管理者／公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会